

鈴木成高の国際政治論はいかに形成されたか

—ランケ受容を手がかりに—

葛 谷 彩

目 次

はじめに一問題の所在

第1節 出発点としてのランケ史学—『ランケと世界史学』(1939)を中心に

(1) ランケの歴史論

(2) ランケの政治論とヨーロッパ国際政治論

第2節 実践としてのランケ史学—『歴史的国家の理念』(1941)と『世界史的立場と日本』(1943)

おわりに—ランケからマイネッケ、リアリズム国際政治学へ

はじめに一問題の所在

本稿では、第2次世界大戦中の論考に焦点を当てて、鈴木成高の国際政治論がいかに形成されていったかを概観する。鈴木は、著名な哲学者である西田幾多郎を中心とする知識人グループ「京都学派」の唯一の歴史家であった。「京都学派」の四天王の1人⁽¹⁾として、「近代の超克」や「世界史的立場と日本」などの重要な座談会に積極的に参加し、戦時下の日本が欧米に対抗する「大東亜戦争」を正当化するための世界史哲学を模索した。戦後は戦争への知的協力を理由に公職追放となり、その後保守派知識人として活動した⁽²⁾。

近年、国際政治学(IR)⁽³⁾の分野で京都学派に対する関心が高まっている。そこには主に3つの志向が見られる。第一に、日本独自の国際政治学理論としての京都学派の議論に注目する志向である⁽⁴⁾。

そうした研究では、国際関係における文化やアイデンティティの要素を重視するコンストラクティビズムとの親和性が指摘される。すなわち、そこでは国際関係の文化的側面に関心が持たれており、それゆえ、『日本文化の問題』（1940）の著者としても知られる京都学派の指導者である西田に注目する傾向がある。

第二に、批判理論およびポストモダン論の観点からの「非西洋」IR理論としての評価である⁽⁵⁾。

それらの研究では、近代とヨーロッパ中心主義を克服するために、非西洋的かつ日本的な世界史哲学を構築しようとした京都学派の試みについては一定の評価はされるものの、アジア諸国に対する帝国主義的侵略である戦争と「大東亜共栄圏」という構想を正当化することによって、西欧列強と同じ畀にはまったと厳しく批判する。そこでは、京都学派の第一世代（西田幾多郎、田辺元、三木清）に焦点が当てられ、世界史哲学のプロジェクトにより積極的に関わった第二世代の「四天王」を批判する傾向が強い。

第三に、IRのディシプリン史および国際思想史⁽⁶⁾からの評価である。とりわけ日本では、戦後日本のリアリズム国際政治論の成立と展開についての関心から、京都学派に着目する研究が目立つ。そこでは京都学派の議論におけるドイツの知的伝統、特にランケの歴史主義の影響に注目し、彼らの世界史哲学を戦前日本の国際政治論の一つとみなしている⁽⁷⁾。第一と第二の研究動向と比較すると、これらの研究は世界史の哲学により関心があり、「四天王」の議論をより多く参照している。

ここで本稿が鈴木成高の国際政治論に注目する理由を説明したい。第一に、彼は京都学派唯一の歴史学者であり、ランケの歴史哲学に関するスタンダードな著作として有名な『ランケと世界史学』の著者であるため、ランケの歴史論である歴史主義に精通していた。第二に、彼は戦中・戦後を通じて一貫して国際問題に強い関心を持っていたことである。ランケの歴史主義やマイネッケの「国家理性」論などドイツの知的伝統に知悉していたことから、鈴木成高は戦後のリア

リズム国際政治学にも強い関心をもっており、ユダヤ系ドイツ人の亡命者として戦後アメリカでリアリズム国際政治学の確立に貢献したモーゲンソーの著作 *In Defense of the National Interest* (1951) を翻訳して紹介した⁽⁸⁾。また、自身も国際政治への関心から、日本のナショナル・インタレストについての歴史的考察を行ったり、平和、核兵器や国際連合など世界政治の現代的問題についても論じている⁽⁹⁾。

しかし、西田幾多郎や三木清、田辺肇に比べると、国際政治学における鈴木に関する研究は少ない。筆者と関心を同じくする酒井 (2013) や中西 (2017) は国際政治学のリアリズム論との関連で鈴木に言及しているが、部分的に論じるにとどまっている。中西 (2017) は、ランケの世界史哲学が京都学派の世界史哲学に与えた影響に言及し、それを国際政治論とみなしているが、戦後の議論は扱っていない。酒井 (2013) は、日本の国際政治論の戦前・戦中から戦後への連続性を論じている。しかし、鈴木がIRのリアリズム理論に関心を寄せていたのは、マイネッケの国家理性論の問題にコミットしていたからであることを強調し、ランケの歴史主義についての言及はない⁽¹⁰⁾。

本稿では、主として戦前・戦中の鈴木の世界政治論をとりあげ、それがドイツの知的伝統、とりわけランケの歴史論、政治論およびヨーロッパ国際政治論に立脚していたことを明らかにする。

本稿の意義は、以下の3点にある。

第一に、戦前ドイツの知的伝統に根ざす国際政治学におけるリアリズム国際政治理論の知性史への貢献である⁽¹¹⁾。第二に、特に戦前ドイツの知的伝統の系譜に焦点を当てた日本国際関係論の知性史の発展への貢献である⁽¹²⁾。第三に、米国主導のリベラルな国際秩序が衰退し、中国やロシアなどのいわゆる権威主義体制諸国との分断が進行し、グローバル・サウスの台頭およびグローバル化の加速による先進国の反グローバル・ポピュリズムや保護主義の台頭によって多様化する昨今の世界政治に対して、今後の展望を考えるための実践的な示唆

を与えるであろう。

第一節では戦時中の著作である『ランケと世界史学』（1937年）を中心に、鈴木によるランケの歴史論、政治論およびヨーロッパ国際政治論を概観する。第二節では『歴史的国家の理念』（1939年）、『世界的立場と日本』（1942年）を中心に、そうしたランケ理解がどのように戦時中の京都学派の世界哲学に応用されたのかを明らかにする。最後に、これまでの議論を踏まえ、エピローグとして敗戦後の鈴木論稿「世界機構の要請」（1946年）を取り上げ、戦後の鈴木論の国際政治論におけるドイツの知的伝統の受容の変遷を示唆する。

第1節 出発点としてのランケ史学—『ランケと世界史学』（1939）を中心に

（1）ランケの歴史論

○鈴木論のランケへの関心

中世ヨーロッパ史が専門の鈴木がなぜランケに関心をもったのか。ランケのどのような歴史論や政治論に着目し、そこからどのような展望や示唆を得たのか。彼の主著であり、当時多くの学生にランケ歴史学入門書と読まれた『ランケと世界史学』を中心に見ていく。

なお同書を執筆した経緯について、鈴木は『中公バックス ランケ』の刊行に際しておこなわれたドイツ史学者の林健太郎との対談の中で、「ランケに当時関心を持っていた西田（幾多郎：筆者注）門下の哲学者たちにより書かせられた」と回想する⁽¹³⁾。さらに、二通りのランケ（文献批判史学の確立者としてのランケおよび歴史哲学者としてのランケ）がいると指摘し、西田らは後者のランケに惹かれたと言及。「個別の中に普遍を見る、だから個別を個別に終わらせないという点」であったと述べる⁽¹⁴⁾。これは鈴木においても同様であったと考えられる。なぜなら、それは鈴木が『ランケと世界史学』の中で世界史家としての

ランケに着目し、かれの歴史が国民史を含めてすべてが世界史であったと評価している点につながるからである。

『ランケと世界史学』の冒頭にあるとおり、鈴木がランケ、とりわけ世界史家としてのランケに着目したのは、当時彼自身もその一員である（日本の）歴史学が直面する課題ゆえであった。それは近代化にともなって専門化（specialization）が進む歴史学における相対主義と全体性の喪失の問題、その近代を生み出し世界に拡張したヨーロッパの没落によりクローズアップされた世界史におけるヨーロッパ中心主義の問題であった。これらの課題に対応すべく新しい世界史学を探究するに当たってかれが立ち返ろうとしたのが、その厳しい史料批判の確立により近代歴史学の父と目されたランケであった。但し、鈴木がランケに注目するのはそれが理由ではなく、ランケが一貫して「世界史学」を追究した点にあった。晩年『世界史』の著述（9巻）に没頭し、未完に終わったランケであったが、鈴木はランケにおいては「世界史」ばかりが世界史であるのではなく、その業績のすべてが世界史であると考えていると述べ、英国史、フランス史、プロイセン史という国民史においても世界的であると論じる。すなわち、ランケはその出発点において、既に「個別の学」としての歴史学に対して「世界史学」を樹立しようとした。世界史は単なる博識から生まれるものでなく、偉大なる精神から生まれるものであり、この点にこそランケ史学の意義があるとする⁽¹⁵⁾。

鈴木によれば、国家や民族などあらゆる個体の独自性を重視し、その独自性に基づいてそれぞれ発展をしていく歴史主義的な歴史の叙述こそが、彼の世界史（＝普遍史）を可能にした。啓蒙思想史観のように個体が全体（一般的理念など）に吸収されたり、従属するのではなく、各個体がお互い対立・競争するなど関係をもつことで、多様な個体を含む関連が生じ、それが普遍（多元的統一）を形成するのだと論じる。ランケにとっての普遍とは、「各時代を支配している一般通念のような観念ではなく、事実と事実とを結ぶもの」であり、したがっ

である現象は決して単独で起こるのではなく、常にその背景に理念的な関連をもっている。それゆえ、フランス史という個別の歴史を論じても、それは同時に個別の歴史とつながってる世界史(=普遍史)を論じることになる⁽¹⁶⁾。

このように鈴木にとって重要であったのは、ランケの世界史が各個体(民族、国家)の独自性を重視しつつ、同時に普遍的であったことであった。もちろん19世紀の歴史家ランケが描いた世界史はあくまでヨーロッパ限定の世界史であった。そして鈴木もこのような世界史像が現在においても正しいとは言えないと認める。かつてヨーロッパ、イコール世界であり、近代の世界はヨーロッパが作り上げ、それを世界に拡張していった。しかし、ヨーロッパはいまや没落しつつあり、ヨーロッパの歴史だけで世界史を論じることは困難となった⁽¹⁷⁾。鈴木は次のように述べる。

われわれはいま新しい世界像をもたねばならない。しかしその前にわれわれはヨーロッパがそもそも何であるかをその根本に遡って考え直す必要があるであろう⁽¹⁸⁾

なぜなら、19世紀のヨーロッパの観念は今日においてもなお人々の常識を支配しているからであり、ただヨーロッパをもはや過去の世界として否定しても、それは新しい世界史像を作り上げることにはつながらないからである。しかも近代ヨーロッパ自体もあくまでヨーロッパ全体の歴史の一部にすぎない。近代という時代を克服するためには、近代以前のヨーロッパを理解することから始めなければならないと鈴木は結論づける⁽¹⁹⁾。ヨーロッパ史の専門家ということもあったであろうが、鈴木は一方では近代やヨーロッパ中心主義を批判しつつ、他方で安易に「ヨーロッパ」を否定したり、オルタナティブとして「東洋」というあいまいな世界像をつくってそこに逃げ込むということはしなかった。同書の中でも、近代や欧米に対する批判が高まり、自由主義の終わりや日

本主義が強く主張された当時において、外国学者の研究を形だけまねてもつまらないのではという西洋史学者に向けられた批難に対して、自分自身はそれをつまらないと思ったことは一度もない。率直に言うならば、つまらない独創を求めるよりも優れた外国学者の研究を熟読することにより多くの満足と意義を感じてきた⁽²⁰⁾、と断言する。鈴木のような姿勢は、後で説明する座談会「世界史的立場と日本」や「大東亜共栄圏の歴史性と倫理性」においても、「大東亜共栄圏」の実体性と可能性について、他の参加者より懐疑的なスタンスをとらせることにつながったと思われる⁽²¹⁾。

(2) ランケの政治論とヨーロッパ国際政治論

同書の中で、鈴木はランケの国家論とヨーロッパ国際政治論について取り上げ、それもまたランケの歴史論（歴史主義）に基づいて展開されているとする。つまり、「個体」に当たるのはここでは「国家」であり、ランケは、啓蒙思想において特徴的な、国家を制度や社会契約といった一般的な観点から論じる一般的政治学を批判し、それぞれの国家は歴史的に形成されたものであり、したがってそれぞれ異なる人格性をもつと論じる。それは国家にとって死活的なものであり、いわば一種のアイデンティティであり、それと失った国家は生命を失い没落するほかないとする。それは軍事的だけでなく精神的存在でもあり、国家の独自性を支えている「道徳的精力（moralische Energie）」とランケが呼ぶ一種の生命力である⁽²²⁾。こうしてみるとあたかも国家を一つの人格のように語っているが、ランケによれば、国家単独ではこうした生命力を維持して自らの個性を発揮することは困難であり、他の国家との間の関係性、すなわち多元的普遍においてはじめて可能であると述べる。したがって、各国家は「道徳的精力」に突き動かされて、他の国家との関係性の中で自らの個性を常に主張しなければならなくなる。それは他国とのほげしい競争をもたらし、ときには戦争をもたらす。しかしそれはヨーロッパの破滅に至ることはない。なぜか。あ

る国が道徳的精力に駆られて自己主張を強めて覇権を追求すると、それは他の国に、とりわけ小国にとって自らの個性（アイデンティティや生存）を圧迫されることを意味する。そうすると他の国家は同盟などを結ぶことで覇権国に対抗しようとする。これにより覇権国の優越が抑制され、大国間関係において均衡が生じ、安定が回復する。すなわち、一方での諸国の軍事的独立と文化的独自性が守られ（多元性）、同時にヨーロッパ全体の安定性が維持されてきたと述べる。このような国際関係をランケは「国家系（Staatensystem）」と呼び、国家系はそれを形づくる各国家の独自性によって支えられるもので、独自性の棄却によって成り立つものではないとする⁽²³⁾。鈴木はこのように説明する。「国際関係は国家の譲歩によってつくられるものでなく国家の主張によってつくられるものである。多様の同一化によってでなく多様の調和によって生まれる秩序であり、国家はもっとも国民的であるときにかえってもっとも世界的である」⁽²⁴⁾と。ここでは各国家が「個性」であり、国際関係が「(多元的) 普遍」に当たり、ランケの歴史論（歴史主義）が基礎となっていることがわかる。とりわけ列強（＝大国）は優れた「道徳的精力」であり、強烈な独自の原理をもっていると述べ、これにあてはまる国としてフランス、イギリス、ロシア、オーストリア、プロイセンを挙げる。執筆当時、ランケの念頭にあったのはフランス革命とその後のナポレオン戦争が他の大国に与えた脅威であった。普遍的な人民主権という思想とそれを他国にも広げることが掲げつつヨーロッパにおける覇権を追求したフランスは、一方では同盟を組んだ他の列強の反撃、他方では支配下に置いた各国の抵抗にあい、挫折した。こうしてヨーロッパの平和が回復すると同時に、ドイツ諸国をはじめ、各国のナショナリズムが覚醒させられ、そこでは豊かな国民文化が形成されていった⁽²⁵⁾。まさにランケの理想とする「多元的普遍」が確立されたのであり、このような「個性」と「普遍」が互いに関連し、活力と安定が両立するヨーロッパ国際政治を機能させる大国（列強）間の勢力均衡のメカニズムを、ランケは「守護霊」と呼んだ⁽²⁶⁾。それゆえに、ランケはヨー

ロッパ国際政治史を世界史として描いたと鈴木は論じる⁽²⁷⁾。

第2節 実践としてのランケ史学—『歴史的国家の理念』(1941) と『世界史的立場と日本』(1943)

以上、鈴木によるランケの歴史論および政治論・ヨーロッパ国際政治論を概観した。それでは、鈴木はランケの著作を通じて得た知見を現実の世界政治にどのように応用し、それによってどのような示唆を得たのであろうか。以下、1937年の日中戦争を契機に執筆された論集『歴史的国家の理念』(1941)、ならびに1941年の大東亜戦争勃発前後に行われた京都学派の四天王による3回の座談会の内容をまとめた『世界史的立場と日本』を手がかりに見ていく。なお後者については、あくまでランケに関する言及と鈴木の発言に焦点を当てた考察であることを断っておく。

1937年の日中戦争は、知識人にとっても大きな衝撃であった。つまり、日本が中国本土にも本格的に軍事攻撃したこと、それにより欧米諸国から非難を浴びたことは、日本が国際社会から孤立していることを痛感させたと同時に、この出来事を世界的にどう位置付けていくか(正当化していくか)という問いを知識人に突き付けた。鈴木も例外ではなく、事態の意味を理解するために、さまざまなパンフレットや出版物を読み漁った。しかし、それによって事の本質を掴むことはできなかったとし、「ニュース的」でなく「歴史的」にそのことが持つ意味を考察する必要を読者に訴える⁽²⁸⁾。それを歴史家として実践して得た一つの答えが、論文集『歴史的国家の理念』(1941)に収録された「世界史と大英帝国」であった⁽²⁹⁾。すなわち、ヨーロッパ国家であるとともに世界において広大な植民地や勢力圏をもつヨーロッパ外国家でもある大英帝国の崩壊(それは同時に英米が担うアングロ・サクソン秩序の動揺を意味した)が、このような世界情勢の転換をもたらしたとする。つまり、それはヨーロッパの没落と非ヨーロッパの台頭という現実を意味するに他ならず、日中戦争という出来事も

このような長期的な世界史的文脈において理解されるべきであると示唆する。同時にイギリスという国民国家が世界への進出により、多民族・多人種を含む広大な「大英帝国」さらに「コモンウェルス」に変容していくことで生き残りを図ってきたとする鈴木の大英帝国論⁽³⁰⁾には、後に日本が戦争目的として掲げた日本主導の「東亜共栄圏」という「地域秩序」がそれに対抗できるだけの実体をもっているのかという問いにつながっていると思われる⁽³¹⁾。

ランケへの言及については、同書に収録された別の論考「歴史的国家の理念」において主としてなされている。その中で鈴木はナチ・ドイツやソヴィエトのような20世紀型の全体国家が台頭し、いわゆる自然法的・制度的な19世紀型近代国家の限界とそれに代わる新しい国家像が求められる中、そうした考え方を批判し、ランケの国家論を参照しつつ、「歴史的国家」への立ち返りを提唱する。それはランケの国家論が19世紀的近代国家が立脚する一般的・抽象的な自然法的国家論とは異なり、歴史における現実的なものを含んでいるからである。鈴木はランケの『政治問答』を参照しつつ、以下のように述べる。

（ランケの唱える）歴史主義—それは何らの一般的絶対的原理を容認せず、各個体についてそれぞれの理由と価値とを絶対化せんとする個別化の原理を主張するものである—は、かかる個体生命としての歴史的国家を発見したのである。ランケによれば国家の原理は、ただすべての国家が同じ出発点から出ていないという歴史的事実のなかに存している⁽³²⁾

さらにランケの想定している歴史的国家が権力国家であるのみならず、精神的なものを含んだ“Das Real-Geistige”なものであるとし、マイネッケの「国家理性」論にも言及しつつ、以下のように結ぶ。

力は国家の不可欠なる本質ではあるけれども、唯一なる本質ではない。国家

はまた同時に一個の精神であり、ランケのいわゆる「道徳的精力」(moralische Energie)である。これあるによって国家ははじめて単に文化の容器たるにとどまらず、それ自身において実体であり内容でありうるのである⁽³³⁾

ここで言及されたランケの「道徳的精力」は「モラリッシュェ・エネルギー」として、世界史哲学を模索していた京都学派の四天王(西谷・高坂・高山・鈴木)において関心が共有され、後に大東亜戦争(1941年)の前後に『中央公論』誌上で行われた座談会「世界史的立場と日本」(1941)と「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」、とりわけ後者において中心的なテーマとして取り上げられた。西洋列強(英米)に対して、日本を盟主とする「東亜共栄圏」をどのように歴史哲学的かつ世界に開かれた形で擁護するかが焦点となった際に、ランケの「モラリッシュェ・エネルギー」は、中国ではなく日本による東南アジアをも含む同地域圏の建設の必然性を正当化するように思われたのである。いわく、没落するヨーロッパに代わって新しい秩序原理を創造し、東アジアに存在する唯一のモラリッシュェ・エネルギーを有する近代国家として(中国にはこれがないとされた)、東亜共栄圏を指導し、各民族のモラリッシュェ・エネルギーを覚醒させ、伝播させるという使命とそれを可能にする力を日本は有しているというものである⁽³⁴⁾。

彼らがランケの「モラリッシュェ・エネルギー」を取り上げたのは、東アジアには没落するヨーロッパや対戦相手である英米のように統一性がないという、この構想がもつ非現実性を補完すると考えられたからであろう。それと同時に、とりわけ3回目の「総力戦の哲学」において顕著であるが、戦争目的を正当化するに際し、倫理性の問題を言挙げしなかったのもその一因であろう。彼らが非歴史的であるとして批判した、抽象的理念に拘泥する左派のマルクス主義と世界性と倫理性を欠いた右派の国体論者に抗して⁽³⁵⁾、力と道義を備えたランケの「モラリッシュェ・エネルギー」は非常に魅力的に映ったと考えられる。もっと

も戦後、これが仇となって京都学派の世界史哲学はアジア侵略が本質であった「大東亜戦争」を倫理的・哲学的に糊塗した企てとして批難を浴びることになった。

このようにランケの「モラリッシェ・エネルギー」に専ら注目が集まる中、これとは異なる影響を見出すことが出来る。たとえば冷戦終焉後に京都学派の世界史哲学をランケの受容との関連で本格的に取り上げた坂本多加雄は、ランケの歴史主義に由来する、欧米の一元論的・普遍の世界観に抗して非ヨーロッパ世界を対象とし、その地域に内在する固有性を重視する彼らの「多元的世界観」に一定の意義を認めている⁽³⁶⁾。さらに敗戦により挫折し、かつ東南アジア地域への理解不足や実証主義的な見地からの考察を欠いていることを認めた上で、「わが国が長期的展望に立って自らの立場を主張しようとした史上ほとんど唯一の例である」として、冷戦が終焉した今、共存に向けた多様性の承認を出発点として、今後の日本が国際社会に対処して行く上での何らかの指針を得られるのではないかとする⁽³⁷⁾。「はじめに」で触れたように、戦後米国主導で構築された「リベラル国際秩序の終わりが指摘され、米中による新冷戦もしくは世界の多元化や無極化が論じられる中、坂本の示唆は今日の日本にとってもより一層重い問いとして突きつけられていると言えよう。

それでは、参加者の中で唯一の歴史家であった鈴木はこの座談会においてどのような役割を果たしたのだろうか。鈴木は一方では他のメンバーのヨーロッパ中心主義批判に同調し、ヨーロッパの没落を近代の終わりと捉え、そうした「近代の超克」を行ないつつある主体としての非西洋で唯一の近代国家を建設した日本の果たす役割を称揚しつつも、「東亜共栄圏」の具体的実態について一定の懐疑を示していた。具体的には「西洋」世界に対して、日本が主導するとされる「東亜共栄圏」にはそれに対抗できるような倫理的・歴史的根拠があるのか、また「東亜共栄圏」内において、各国・各民族に共通の倫理や理念があるのかといったものである⁽³⁸⁾。こうした鈴木姿勢も、参加者唯一の歴史家

であったということの他に、鈴木がランケの歴史論において学んだ歴史主義的態度を見出すことができるように思われる。

おわりに—ランケからマイネッケ、リアリズム国際政治学へ

これまでランケの歴史主義における歴史論と政治論やヨーロッパ国際政治論を鈴木がどのように受容し、それを第二次世界大戦という日本の危機に際して、どのように用いて世界政治における日本の立場を歴史的に考察してきたかを見てきた。最後にそうした試みの挫折とも言うべき敗戦後に鈴木が著した論考を紹介したい。1946年の論文「世界機構の要請」で、鈴木は国際連合の成立に見られるような世界機構が世界の一体化と原爆の開発と使用による世界の大転換に際して、普遍的に要請されているとしつつ、それが新たな理念的な企てではなく、歴史的にも要請されていることを、ヨーロッパ国際政治史を振り返りながら、明らかにする。その際、世界機構という理念がバランス・オブ・パワーの概念が限界を呈し始めた19世紀にはすでに顕在化していたと述べ、普遍的のみならず歴史的合理性という根拠を持っていると論じた。さらに、そうした歴史的考察に加えて、それを現在の緊要な課題にした原子力兵器の登場とその衝撃に言及し、当時の最新の世界情勢（イギリスのイーデン元外相の演説、原子力の国際管理の問題など）やアメリカのスパイクマンなどの最新のリアリズム国際政治学を参照するなど、鈴木が依然として現実の世界政治に対してアクチュアルな関心を有していたことがうかがえる。

以上の世界政治をめぐる情勢や学問状況を踏まえた上で、鈴木は敗戦を経て非軍事的平和国家となった日本にとってこそ、世界機構の要請が重要性をもつとし、その世界史的意味について示唆する。

他方で、同論稿においてはランケについても言及されている。しかし、それは17・18世紀にピークを迎えた勢力均衡の理念に基づく、各国家の独立性と

共存の両立を可能にしたヨーロッパ国際関係を描き出したという点においてであり、むしろここではマイネッケの「国家理性」が取り上げられ、道義がなかったわけではないとしつつ、道義と力を媒介させる国家理性をもちえなかったことが戦前・戦中の日本の問題であったとする⁽³⁹⁾。これはランケの「モラリッシュ・エネルギー」から、近代の悲劇性を踏まえたマイネッケの「国家理性」への移行であると同時に、「世界史的立場と日本」についての考察の敗戦を経た継続と言えよう。

ここには後の国際政治に関する鈴木の問題関心（日本のナショナル・インタレストの歴史的考察、平和論、原子力の問題）が表出されている。その意味ではリアリズム国際政治学を積極的に取り入れるなど、新たな取組みと言える。それと同時に、歴史的アプローチの重要性を一貫して強調している点で、ランケの歴史主義の影響の一貫性を看取することもできる。なお戦後の鈴木の世界政治論については、別稿での考察に譲りたい。

注

- (1) その他には、哲学者の西谷啓治、高山岩男および高坂正顕がいる。
- (2) 鈴木は1949年から保守系の雑誌『心』を創刊し、同誌には「オールド・リベラル」をはじめとする多くの知識人が寄稿した。
- (3) IR (International Relations) の訳語としては「国際関係論」が使われることが多いが、本稿では「国際政治学」を同義として扱う。
- (4) 猪口孝 (2007) 『国際関係論の系譜』東京大学出版会、堀内めぐみ (2020) 「国際関係理論はどこまで普遍性を有するのか」『国際政治』200号, p. 37-51 など。
- (5) Shimizu, Kosuke (2011) 'Nishida Kitaro and Japan's interwar Foreign Policy,' *International Relations of Asia Pacific*, 11 (1), -(2022) *The Kyoto School and International Relations: Non-Western Attempts for New World Order*, Routledge. 土佐弘之 (2010) 「近代のプロジェクトとしての「汎アジア主義」再考」佐藤幸男・前田幸男編著『世界政治を思想する』国際書院など。
- (6) Schmidt, Brian C. (1998) *The Political Discourse of Anarchy: A Disciplinary History of International Relations*, State University of New York Press, idem. (2012)

International Relations and the First Great Debate, Routledge, Ashworth, Lucian M. (2014) *A History of International Thought: From the origins of the modern state to academic international relations*, Routledge, Armitage, David (2013) *Foundations of Modern International Thought*, Cambridge University Press, Guilhot, Nicolas (2014) "Portrait of the Realist as a Historian: On Anti-Whiggism in the History of International Relations," *European Journal of International Relations*, 21 (1), 3-26, idem. (2017) *After the Enlightenment: Political Realism and International Relations in the Mid-20th Century*, Cambridge University Press, Schmidt/Guilhot(eds.) (2019) *Historical Investigations in International Relations*, Palgrave Macmillan.

- (7) 酒井哲哉 (2013) 「戦後の思想空間と国際政治論」酒井編著『日本の外交 3 外交思想』岩波書店, 中西寛 (2017) 「現代国際政治の思想的背景—京都学派の世界像からの示唆」東郷和彦・森哲郎・中谷正憲編著『日本発の「世界」思想—哲学・公共・外交』藤原書店。
- (8) ハンス・モーゲンソー (1954) 『世界政治と国家理性』鈴木成高・湯川宏訳, 創文社。
- (9) 鈴木成高 (1961) 「日本のナショナル・インタレストの歴史的考察」鈴木 (1990) 『世界史における現代』所収, 同 (1946) 「世界機構の要請—バランス・オブ・パワーへの批判」同 (1947) 『世界と人間性』弘文堂所収, 同 (1952) 「原子力時代と文化革命—真の平和論を求めて」『改造』33(1), p. 42-52, 同 (1955) 「歴史家は平和をかう考える」『心』8(9), p. 2-13.
- (10) 中島岳志 (2013) 「京都学派の遺産：鈴木成高における世界史の哲学と戦後保守」酒井哲哉編著 (2013) 『日本の外交 3 外交思想』岩波書店は鈴木に焦点を当てたほぼ唯一の著作であり, 戦後も一貫してランケの歴史主義に傾倒していたことを強調している。しかし彼は, 鈴木の世界政治観よりもむしろ保守的知識人としての活動に焦点を当てており, その研究対象は本稿の範囲外である。
- (11) Guilhot (2014, 2017), Bew, John (2016) *Realpolitik: A History*, Oxford University Press, Specter, Matthew (2022) *The Atlantic Realists: Empire and International Political Thought Between Germany and the United States*, Stanford University Press, 拙著 (2005) 『20 世紀ドイツの国際政治思想—文明論・リアリズム・グローバリゼーション』南窓社, 宮下豊 (2012) 『ハンス・モーゲンソーの国際政治思想』大学教育出版, 大原俊一郎 (2013) 『ドイツ正統史学の国際政治思想：見失われた欧州国際秩序論の本流』ミネルヴァ書房。
- (12) 中西寛 (2016) 「権力政治のアンチノミ——高坂正堯の日本外交論」五百旗頭真・中西寛編著『高坂正堯と戦後日本』中央公論新社, 同 (2017), 酒井 (2013), 春名展生 (2015) 『人口・資源・領土：近代日本の外交思想と国際政治学』千倉書房,

鈴木成高の国際政治論はいかに形成されたか

拙稿「戦後イギリスと日本の古典的国際政治論のミッシング・リンク—H. バターフィールドと高坂正堯の場合」葛谷彩・小川浩之・西村邦行編著『歴史の中の国際秩序観：アメリカの社会科学を超えて』晃洋書房。なお中西（2016）は、京都学派そのものについては論じていないが、戦後日本の著名なリアリズム国際政治学者である高坂正堯の日本外交論の知的ルーツについて、ヨーロッパの知的伝統、特にドイツ歴史主義の間接的影響に言及している。さらに、モーゲンソーやバターフィールドのような戦後の古典的リアリストや、父である高坂正顕が属していた京都学派を通じて、それが高坂の見方に影響を与えている可能性を論じている。

- (13) 鈴木成高・林健太郎（1974）「対談：ランケ史学の心髄」『世界の名著 ランケ』中央公論社、附録、p. 2.
- (14) 同、p. 7.
- (15) 鈴木成高（1939）『ランケと世界史学』弘文堂、p. 2-3.
- (16) 同、p. 25-32.
- (17) 同、p. 134-136.
- (18) 同、p. 135.
- (19) 同、p. 135-136.
- (20) 同、p. 5.
- (21) 第2節参照。吉川弘晃（2023）「『世界史』をめぐる闘争—西洋史家・鈴木成高の「近代の超克」とその方法としての「西洋」」『Antitled』2、2023年3月、p. 63-87.
- (22) 『ランケと世界史学』、p. 76-80.
- (23) 同、p. 80-81.
- (24) 同、p. 81.
- (25) 同、p. 81-83.
- (26) ランケ「列強論」『中公バックス 世界の名著 47 ランケ』林健太郎責任編集、中央公論社、1980年、p. 53.
- (27) 鈴木成高（1941）『歴史的国家的理念』、p. 125.
- (28) 鈴木（1941）『歴史的国家的理念』弘文堂、p. 221-223.
- (29) 同、p. 3-156.
- (30) 鈴木は既にこの中で、かかる変容を遂げた「大英帝国」が、来る日本の東亜共栄圏建設にとって大きな障害になりうるということを指摘している。同、p. 59-66.
- (31) 「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」高坂正顕・高山岩男・鈴木成高・西谷啓治（1943）『世界史的立場と日本』中央公論社、p. 203、p. 251-253.
- (32) 『歴史的国家的理念』p. 175.
- (33) 同、p. 183.
- (34) 「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」『世界史的立場と日本』、p. 135-264.

鈴木成高の国際政治論はいかに形成されたか

- (35) とりわけ右派を意識して、国史中心の歴史教育を批判している。「世界史的立場と日本」『世界史的立場と日本』, p. 45-46, p. 70-92.
- (36) 坂本多加雄 (1994) 『日本は自らの来歴を語りうるか』 筑摩書房, p. 214-216.
- (37) 同, p. 236-248.
- (38) 注(31)参照。
- (39) 鈴木 (1946) 「世界機構の要請—バランス・オブ・パワーへの批判—」『展望』昭和21年9月号, 同 (1947) 『世界と人間性』 弘文堂所収。